

十一、汝が意を信ずること無かれ

昔一人の愚かな男がいた。妻をめとつたが、それは大変な美人であつたので、大変に愛していた。しかし婦おんなには誠はなかつたので、一人の男と仲よくなつた。そこで愚かな亭主を棄て、その男と逃げようとして、一人の老婆にたのんだ。自分が逃げた後、ほかの女の屍骸をもつて来て寢床の中に入れておき、愚かな夫が帰つて来た時、お前の妻はこの通り死んでしまつたと聞かせた。男はそれを本当にして、哀哭懊惱しつつ、火葬をすました。そしてその骨を袋に入れ、毎夜懐いて悲しんでいた。その後、逃げた婦は昔が恋しくなり、帰つて来て、私は貴郎の妻ですと許しを求めたが、その男は、私の妻は死んでしまつて久しいことだ、だれが自分の妻だなどというのかと言つて、何度言つてもついに聞き入れなかつた——これは『百喻経』に出ている一つの物語りである。そしてその話は「彼の外道、他の邪説を聞いて心に惑著を生じ、謂ふて真実となし、永く改むべからず、正教を聞くと雖も、信じて受持せざるが如し。」と結ばれてある。

この一つの比喩は、いろいろなことを考えさせるが、その一つは、正しいことを聞く前に、一つの邪説を信じていることである。私どもは、正法を聞く前にいかに多くの邪説を信じていることであろう。その邪説が、どれだけ正法を聞く邪魔になつていることであろう。邪説に迷惑し執着して、真実に愛すべきものを失うものは、この愚かな男だけではあるまい。

正法を聞く前に、先入的な固執を持つていては正法は耳には入らない。しかしながら凡夫は、必ず邪よこしまな固い執着を持つてゐる。そこで正法は必ず、われらの上に智慧を授けて、この固執の上に否定を下して、その邪な見解を打破り、正法を正法として信知せしめる。正法が訪れて信じられぬかぎり人間は迷妄を出ることはできない。

邪説を固執することが邪見である。仏はこの邪見を最も深い罪惡と見た。ゆえに『涅槃経』には「一切の悪行は邪見を因となす。一切悪行の因は無量なりと雖も、もし邪見を説けば即ち己に撰せん尽しぬ。」と説かれてある。邪見は、邪説に執着して、正法を聞かず、一を得ようとして方を失う心である。

凡夫は信すべきを信ぜず、信ずべからざるを信ずる。疑うべからざることを疑い、疑うべきを疑わない。

とんでもない風評や、勝手な邪推や、あるいはことさらに陥れるための讒謗などに傷つき悩んだことのある者が、はじめて他人の悪口や風評などを、うっかり信じてはならないと知るのだ。

しかし人間は、自分のことになること、無い風評を立てたとて怒るが、その口の下から、他人のことはまた聞きであろうが、風評だろうが、その場ですぐ信じて固めて、非難の対象にしてしまう。考えなくてはならないことである。

『四十二章經』に言わく。「仏沙門に告げたまはく、慎みて汝が意を信ずること無かれ。意はついに信ずべからず。慎みて色と会すること無かれ。色と会すれば即ち禍生ず。阿羅漢道を得て、乃ち汝が意を信ずべきのみ。」

慎んで汝が意を信じてはならない。悟りを開いて後はじめて、汝が意を信ずべきであると言われるのであるが、その中間に、色と会することなかれとある。その意がうかがうに、我が意を信じてならないのは、色欲を持つがゆえである。色欲に動かされている間、わが意を信ずることはできないのである。まことに至言と言うべきである。わが心に女を求める心の存在する以上、わが意は信じられないのである。他人が信じられない先に、自分の意こそ信じられないのである。

偽りの骨を抱いて泣いている愚かな男は、自分の信じている心に対する反省がない、信ずべからざるわが心を信じていることの間違ひが見えていない。この信ずべからざるわが心が造った信心こそ自力の信である。聖人には、この自力の信に対する鋭い反省があり、否定があつた。すなわち信巻において「無始より已来、一切群生界、無明の海に流転し、諸有輪に沈没し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂なし。法爾として眞実の信樂なし、是を以て無上の功德値遇しがたく最勝の淨信獲得しがたし。」と述べられたのは、まことに深い内省否定における尊い体験の声である。凡夫は清淨眞実の信樂を持たぬものである。しかもこの雜毒虚仮の信念をもつて最上眞実と誤るがゆえに最勝他力の淨信に入りがたいのである。

汝に愛欲がある間、汝の意を信じてはならない。汝の意そのものが間違ひであるとの、み教えは深い内省懺悔を私に与える。和讃にいわく、

「無明煩惱しげくして 塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは 高峰岳山にことならず。」

愛憎違順するとは、愛すべからざるを愛し、愛すべきを愛せず、憎むべきものを心外に求めて、憎むべからざるを憎むことである。かかる愛憎の違順は、高峰岳山もただならない。無明煩惱しげくして、塵数のごとく限りなく心中に遍満しているではないか。しかもかかるわが意を信じ、わが意に信ぜしめて、どこまでも、我執、我欲、我慢をおし通そうとするのが凡夫である。ああ。わが意ついに信ずべからず。

『百喻經』の中に、こんな話がある。

禿頭になつて冬は寒く、夏は暑くて困っている男があつた。ある名医を訪ねて、「どうか私の頭の禿を治して下さい」と頼んだら、その医師が帽子をぬいで、「私もこの通りである。君を治し得るならば、それより先に私の頭を治す」と言った。

生老病死よりほかにないものが、生老病死よりほかにないものに問題を持つて行つても解決はつかない。病気を祈祷してもらつたところで、祈祷している者も死ぬるのである。禿頭へ禿頭を持ってゆく愚である。だれもかれもみな滅びるのだ。無常

の業火に燃えている者が、無常の風に悩んでいる者を助けはしない。裏切られて泣くのは、信ずべからざるものを信じたがゆえである。

凡夫には実体はない。善も空であり、悪も空である。苦も空であり、楽も空である。その空なる一切に実体ありと信じてそこに邪見をおこすのである。善人だとして、その善を信じてはならない。悪人だとして捨ててはならない。いかなる悪逆煩惱も如来の大慈悲の前には、転じて懺悔し念仏して、大善の行者となるがゆえであり、善人もまた縁次第ではいかなる悪を演ずるやらわからないがゆえである。されば如来は、悪逆といえども、斬ってしまわずに救うのである。善人聖者といえども、それにたよらしめないのである。信ずべきものは如来のみである。

煩惱がもつて愛すべし、信ずべしとなす者は、己の貪欲に都合よき者であり、憎むは、貪欲の支配に服従せぬものである。そこに限りなき邪見と結びつけ、悪魔主義となつて「やつつけろ」と出たり、その横暴久しきになれば自己の特権あるもののごとくに考え、エゴイストになり、暴君になり、その停る所を知らないのである。如来の智慧光により、利劍によつて、その久遠劫来の固き城廓を礎から覆滅し、粉碎されぬかぎり、合掌の人とはならぬであろう。

『大無量寿経』に言わく「大光明を奮ひ、魔をして之を知らしむ。魔、官賊を率い來り逼試す。制するに智力を以つてし、皆降伏せしむ」と。
願わくば智力よ、來つて我の根本をつきたまえ。

静かに念仏すれば、われはまつたく阿闍世であり、提婆であり、韋提希である。されどこの実体なき無善造悪の機に覚める時、不思議やそこには、わが迷妄に苦悩に流したもう限りなき如来の悲涙にふれるのである。安価な感傷も、狡猾な妥協も、高慢な弁疏も許されないので、ただ地獄一定と落在する全体のうち如来撰取の願力を感じるのである。

自己を信じてはならないように他人をも信じてはならない。しかし人を信じてはならないということは、「信ずべきものは自己だけだ」と孤立することではない。孤立はまだ「信ずべきものは、己だけだ」と、自己を信ずるものが残っている。人が信じられない前に、己こそ信じられない。かく自他ともに信ずべき実体のないことがわかる時、如来のみ信ずべきを知るのである。その時はじめて、一切衆生と一体になり得るのである。

人生には、頭に思いかためたような悪人はいないし、思いかためたような善人もいない。一悪を聞けば、その悪を固めて悪人を造り、一善を聞けばそれを固めて善人を作る。思い固めた悪人をもつて人を律し、それを悪み嫌つて相手の心を傷つける。思い固めた善人も正しく人を知つたのでなく悪もまたしかりである。善悪ともに自ら醜さの相にすぎない。善悪を裁くわが心また信ずべからずである。

かつてうちの和尚は、私に道元禅師の教誡を示した。

「無上菩提を演説する師に会はんには、種姓を感ずる勿れ、容顔を見る勿れ。非を嫌ふこと勿れ。行ひを考ふること勿れ。唯般若を尊重するがゆえに、日に三時礼拝し恭敬して更に患悩の心を生ぜしむること勿れ」と。

あの男は生まれが低いのだと、種姓や家柄を卑しんだり、あのお方は身分や家柄が尊いからと、その方を拝んだり、容顔がよいからとそれに迷ったり、悪いから聞かれないとつまづいたり、師の非を挙げていたり、その行いばかり気にしていたりしたのでは、教えが耳にほんとうに入るものではない。ただみ法を尊び、般若を重んずる心だけが、本当の師を発見し、道を発見するのである。しかしこの教誡は、師が弟子に強うるべきものでなく、師が己を弁護すべき語ではない。

世に潔癖症というのがある。少しの不潔をも嫌う性質である。よいように見えても、やはり症はやまいである。大きな汚さは見えないで、身のまわりの小さい汚さや穢れは気になつてならないのである。

だが人間は皆一種の潔癖症ではあるまいか。ちょっと汚いものがついた気がして、新しい錦紗の丸洗いをしたり、お膳のほとりを人が通つたと言つて少しも食べなかつたりするように、人の着物が汚いと言つて人を嫌つたり、人の性格が気に入らないとて、だれもかれも棄ててゆく。これを思うと浄穢不二こそ、真実でなければならぬ。しかし凡夫はけつして浄穢不二を知らない。浄穢不二を知りたもうはただ仏心のみである。われらはただ、浄穢不二を知りたもう大悲に帰して生かさるべきである。

われらにあつては、浄は浄であり穢は穢である。しかも如来は浄穢不二の智慧慈悲によつて救いたもうのである。しかし如来の智慧はやがて他力の信心となつて、今一度合掌を通して人生およびわれを見返さないではいられなくなる。「信心の智慧」「智慧の念仏」の天地こそそれである。善として執着すべきなく、悪としてとどまるなく、本願の前には、善悪浄穢なく、ありのままの中に、無為常住の念仏が光りたもうのである。信ずべからざるわが心に重点をおいて、功利的に仏を弄ぶのでなく、如来によつて限りなく空じられるのである。